

社会科学の目的と「自由」に関する考察

その他のタイトル	The Goal of Social Science and the Definition of “Freedom”
著者	菊地 敦子, 福井 七子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	16
ページ	77-91
発行年	2017-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/11037

社会科学の目的と「自由」に関する考察

The Goal of Social Science and the Definition of “Freedom”

菊地 敦子 福井 七子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

In these two articles, which were written when the United States was in the brink of entering World War II, Benedict is taking on her professional responsibility as an anthropologist to analyze war in a scientific way. She writes in the “Ideologies in the Light of Comparative Data” that what we need to think is what kind of social system brings about minimum individual aggression and frustration. In “Primitive Freedom”, she writes that what gives individuals a sense of well being and freedom can be different in different societies. Even in societies where there is one man who has more privileges than others, he can give his people a sense of satisfaction and a sense of freedom if his privilege is matched with the generosity to extend civil liberties to his people. If, however, the strong man rules others by terror, he is taking away the freedom of its people and will eventually bring discontent to the society. Benedict uses this to argue against the spread of the Nazi State. She uses her study of many societies to urge the Americans people to consider foremost, the importance of creating a society that brings a sense of well being to all its people.

キーワード

ルース・ベネディクト、文化人類学者の使命、自由、他文化、多様性

本稿はマーガレット・ミードが友人であり、また師でもあったルース・ベネディクトの死後10年を経た1958年に、ベネディクトが遺した書簡、論文、日記などをミードの視点から纏めた *Anthropologist at Work* の一部を翻訳したものである。論文 “Ideologies in the Light of Comparative Data” 「比較データから見える諸々のイデオロギー」は1941年から1942年頃の未出版原稿からの抜粋で、もう一篇の論文 “Primitive Freedom” 「未開の自由」は1942年の学術誌『アトランティック・マンスリー』に掲載された論文である。

「比較データから見える諸々のイデオロギー」のなかでベネディクトが述べている「社会は民主主義であるからといって必ずしも自由とは限らず、そして権力への服従は必ずしも自由の抑圧を意味するとは限らない」、また「民主主義が個人の自由を必ずしも保障するものではない」は、非常に興味深い箇所である。ベネディクトは1942年当時の連合国と枢軸国との戦争を、「人

間社会をどのように設定するかを決する二つのイデオロギーの戦いだった」と述べている。(Mead : 1958 : 383)

その関連で読むと、論文「未開の自由」は、「自由」の概念をめぐって、より具体的に書かれたものである。ベネディクトはシベリアのチュクチー族の記述から始める。チュクチー族は豊かで民主的であった。だからといってそれは彼らを自由にはしなかった。彼らは個人の目標を追求する自由はもたなかった。それは社会が彼らを妨害したからである。チュクチー族の社会は互いに援助するというメカニズムをもたなかった。彼らが成功する唯一の方法は、他の人を圧倒するか、追従者になるかしかなかった。「穏やかに暮らしていく道が自分たちの前に広がっている」が「彼らにはそこを自分の足で歩いていくという選択がないことを」チュクチー族はわかっており、自分たちが自由ではないことを知っている。

ベネディクトはもうひとつの部族であるカナダのブラックフット族を選び、対比する。ブラックフット族はベネディクトが過去において二年にわたってフィールド・ワークを行なった部族であった。ブラックフット族はチュクチー族とは異なり、自分たちが自由であるという意識を持っていた。個人的欲望を尊重し、それを実現することは生きる理由であった。ブラックフット族の首長の威厳は、彼に従う者の威信によって左右された。従者の目的を実現するために必要とされるものを与えることが首長の利害となった。ブラックフット族には指導者と配下の間に互惠のシステムがあった。つまり、社会の制度はどうであれ、指導者は配下の者に対して繁栄をもたらすという責任をもっていた。

「特権的グループが勝手気ままにしかも無責任に行動し、特権を持ち続ける」時に「自由」は脅かされるのである。ベネディクトは論文を次のように結ぶ。「人はナチズムに直面して民主主義を支持することができる。なぜなら民主主義のあらゆる失敗にもかかわらず、自分たちの基盤を自由に置き、その自由は共通のものとすることができ、それを拡大していくことができる政治的枠組みを与えてくれるからである。」ナチスの自由は共通のものとはなり得ない。それはまさにチュクチー族に見られるように「敗残者」を暗に示すからである。ベネディクトは市民的自由が戦争時であっても決してないがしろにされるべきではないと訴える。

ベネディクトはさまざまな部族の社会的特徴をあげる。それは生きていくための掟であり、また価値観であり、規則でもあった。ベネディクトが戦時中にあっても変わらぬスタンスをもち、科学的に社会制度に包含されるものを分析していったプロセスを読んでいると、彼女には第二次大戦中にあれほど連合国から恐れられていた日本の社会の根底にあった「仇討ち」なども、日本の社会システムを研究することで認められないとしても理解できたのではないかとと思われる。なぜならネイティブ・アメリカンのある社会では当然果たさねば生き残ることができない制度のひとつにあったことを十分承知していたからであり、また、それが必ずしも文化のさまたげとなるものではないと考えていたのではないかとと思われる。彼女の他文化に対する基

本姿勢は、たとえその文化がどんなに病的に見えようとも、他の文化に害を及ぼさない限り、それぞれの道を進むに任せるべきであるという考えは、彼女の論文、著書のすべてから得られるメッセージであり、哲学でもある。

本文の翻訳に際しては、現在差別的だと考えられている語がある。しかし、ここでは本文の通り訳することにしたことをお断りするものである。

References

- Benedict, Ruth. "Japanese Behavior Patterns" 『日本人の行動パターン』 共著 福井七子、ポーリン・ケント、山折哲雄、NHK 出版、1997 年
- Caffrey, Margaret. *Ruth Benedict: Stranger in this land*, Texas: University of Texas Press, 1989.
- M・カフリー 『さまよえる人 ルース・ベネディクト』 福井七子訳、関西大学出版部、1993 年
- Mead, Margaret. *Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mufflins, 1965.

比較データからみえる諸々のイデオロギー*

現在二つのイデオロギーが対立している。対立する価値観やイデオロギーによって国々が戦う争いはそれほど多くはなく、両サイドが同じものを得ようとする戦いが多い。しかし枢軸国は自分の価値観を広めることに対してあからさまに極端であった。そのため民主主義国家は一般的な書籍や新聞を通して自由のイデオロギーを熱烈に掲げてそれに反論した。ナチス国家はこのような軟弱な自由に対するイデオロギーを否定した。指導者への服従と「新しい秩序」のための自己犠牲を掲げ、そこではより劣った人種が奴隷となり、支配者と能力ある者に服従する。両者のこうした価値観の衝突のなかにあつて、文化人類学者として私たちは、文化相対主義のプロとしてのスタンスを保ち、市民として関わっているにしても懐疑論者であるべきなのだろうか。そうすることが私たちの伝統的なやり方だった。そして私たちが自覚しなければならないことは、一般市民が文化人類学から学んだ最初で最も重要なレッスンは、すべてのことが相対的であるということである。「文化相対主義」という言葉は一般的に使われ、文化というものが何なのかを全く知らないような人にまで使われている。「相対主義」は今日、心理学や社会学の教科書にも表れている。極端な例として教科書 William Graham Sumner, *Folkways*¹⁾ (ボストン、ジン出版、1906年) では何もかも文化に由来するものとしている。サムナーによると、ひとつの制度化された価値観は他の所では価値はなく、私たちにとって価値があると思われていることが他では価値がないことである。つまり、価値に対して懐疑主義者になるのが、比較文化の研究者に残された唯一の選択なのである。

どの文化人類学者にとっても、前提となる懐疑主義は厳密に定義されねばならない。この懐疑主義はいかなる正式な文化制度による影響をも疑うものである。民主主義であろうが、君主制度であろうが、金権主義であろうが、どの主義も活発で安定した国家において実現されている。確信をもって自分の目標を追求した部落においても、また最悪の魔法を使うような部落でさえも、民主主義は君臨した。民主主義は、我々のイデオロギーが賞賛する個人の自由を浸透させるための政治的形態でしかないことは明らかである。しかし、民主主義は個人の自由を必ずしも保障するものではない。一夫多妻制度が安定したまともな家族を形成することもある。他の社会では一夫一婦制がその機能を果たす。しかしそのいずれもがより大きな摩擦があるような分裂した家族も生み出さう。他の文化的な特徴に対しても同じことが言える。神聖な王位であろうと、花嫁につけられる値段にしても、魔法にしても同じである。このような習慣によって社会がスムーズに機能すると言え。また王が神と崇められるので、自分の快樂のために人を利用したり、殺したりすることもある。花嫁に値段がつけられるため、若い男が結婚できなかつたり、魔術師が誰に対しても自分の魔法が使えるために、社会の対立や暴力があるとも言える。

その通りだと文化人類学者は言うだろう。そのため文化人類学者が今日のイデオロギーを言

い換えようとするのはあまりにも極端である。私たちの代表として選ばれている政府が自動的に動き、私たちの権利である自由を守るために自主的に動くとは考えられない。国家主義は文化的な特徴のひとつであり、その機能の仕方は様々である。今日の国家主義は世界秩序を乱すものであるが、この世界の崩壊が「国家主義」によるものだという説明では文化人類学者は納得がいかない。文化人類学者は様々な社会において、自分の部落に対する感情が忠実さや連帯感をもたらすことを知っている。今日のイデオロギーにおいては、私有物が何らかの内在する機能をもっているかのように言われている。私有地に関するよくある議論は、ローウィー（Lowie）が *Primitive Society*²⁾ のなかで集団の所有物を分析する以前の議論と同じレベルにとどまっている。ローウィーがその本で示したように、集団の財産は個人の所有物の代わりにはならない。その本の中で集団の部落と記述された部落であっても、個人の財産はあった。しかし、個人の所有物は他の社会の個人の所有物と同じようには機能しなかった。財産を所有することに内在する同一の機能などというものはないのである。

しかしこのように言うことで問題が片付くのではなく、単に道筋がはっきり示されたに過ぎない。物理化学、そして社会科学といったすべての科学が抱える基本的問題は、ある結果をもたらす条件を学ばねばならないということである。社会科学が自然科学から学べることは次のことである。求めている結果をもたらす条件を見つけるまで、それを探し続けなければならず、その結果をもたらさない条件を見つけるのと同じように、それは科学的に調べることができる。これは *相対性を超えた問題* である。デュルケームはこのような問題を彼の著書 *Division of Labor in Society*³⁾ で取り上げ、出された結論は今日のフィールド・ワークから得た情報から見ると疑問視されねばならない点もあるが、彼がそのような問題を取り上げたという点は重要である。社会科学の大きな目的は、ひとつの社会がどのようにして、そしてどのような方法でまとまっているかを見つけることである。個人の暴力や不満などを最低限にし、社会をまとめる要素を科学的に研究することである。

注

* 1941年－1942年頃の未出版の原稿からの抜粋

1) William Graham Sumner, *Folkways*、ボストン、ジン出版、1906年

2) Robert H. Lowie, *Primitive Society*、ニューヨーク、ボニ・アンド・リバーランズ出版、1920年

3) Emile Durkheim の *Division of Labor in Society*、ニューヨーク、マクミラン出版、1933年

未開の自由*

1890年代、シベリアがロシア皇帝時代の政治犯の流刑地でしかなかった頃、何人かの冒険的な流刑者は退屈しのぎに現地の人たちと交わった。凍ったツンドラで馬やトナカイの群れを追っている見知らぬ部族の人たちの言葉を習ったり、彼らといっしょに居留地から居留地へと旅したり、地元のシャーマンの霊媒を教えてもらったりした。知らないうちに文化人類学者になったこういった人たちのなかで最も才能があったのはヴラディミール・ボゴラス (Vladimir Bogoras) だった。彼はタンという名でロシアの小説を書いていた。北東シベリアのチュクチー族との生活の詳細な叙述は、偉大な文化人類学の文献の一つである。

豊かで殺人的で自殺的なチュクチー族にボゴラスは魅了されていた。定期的に行われる物々交換の場においても、彼らはナイフで人を刺すことがあった。そのため、こういった物々交換の場は物々交換とは呼ばれず、決闘の場と呼ばれていた。ナイフで殺し合うのは家のなかでも行われていた。息子は父親を殺し、兄弟同士でも殺し合っていた。そしてそれに対する罰はなかった。親戚であろうが、他人であろうが、誰かを虐待することができる者が強い人と見なされた。そして強い人は偉い人と見なされ、みんなから羨ましがられた。子どもが生まれると父親は次のように自慢した。「ああ、私は、将来まわりの国に住んでいるすべての人から物を略奪できる強い人を生んだのだ。」

ボゴラスは虐待の状況について知らないわけではなかった。彼は自国で虐待に反対して流刑になったことがあった。ロシア皇帝時代には、国や国から恩恵を受けている人たちに対して抗議した。虐待に抗議するということは、国に対して抗議することであった。しかしチュクチー族には国などない。政治的な組織もない。力と手段さえあれば何をしてもよかった。そして彼らは裕福でもあった。近くの部族には想像できないほど彼らは富んでいた。一人で3000頭以上のトナカイを所有することもあり、それは大いなる富であった。つまりチュクチー族は富んでおり、民主的だった。独裁主義ではなく、経済的に豊かであれば、人間は自由なはずではないのか。このような状況で彼らは自分の目的を追求し、達成できると感じるはずではないのか。

チュクチー族にとって、自分たちが自由ではないということは火を見るよりも明らかだった。彼らに言わせると「そういう運命」なのだ。彼らいわく、「怒る運命にあり、死ぬ運命にあり、超自然の力を受ける運命」にあった。彼らが言うことは本当だった。彼らは憑りつかれたように怒った。歯をむき、唸り、自分で何をしているかわからなくなった。男も女もタバコが吸えないかもしれないとなると、パイプを手に入れるために殺し合った。そしてタバコをすぐに手に入れるためにはどのような価格でも支払うため、経済的に破滅に陥る人もいた。息子たちは父親に対して怒る「運命」にあり、父親は息子に対して怒る「運命」にあった。怒りで人を殺しても、他人はそれに関与することはなく、殺人で得たものは残った人で山分けにされた。自分の死も自分でもたらした。やる気をなくしたり、身体が痛かったりした時、彼らは苦しみと

いっしょに自分もなくすことを好む。彼らが言うには、「私たちは口を開けた敵（霊）に囲まれている」、そして最悪の死は、これらの神々が自分たちに与えようとしている拷問であった。そのため、自分たちの意志で死ぬことを好んだ。彼らは、尋常でないほど毒キノコを求め、その毒キノコを食べる時、「私を死に連れてってくれ」と言った。このキノコによってもたらされた昏睡状態から死に至った人も確かに存在する。しかし、槍を貫通させることによる死の方がもっと一般的であった。若い男性は自分のハラワタを引きちぎらねばならなかったが、年老いた男性は自分の死を誓い、自分の息子に槍で突き刺すことを命じることができた。それは厳格な責任であった。なぜなら自分の死を望んでいることを一度発表したなら、その誓いを取り消せば集落全体に災害をもたらすことになるからである。

チュクチー族の行動についてのボゴラスの記録はここで終わらない。ボゴラスはチュクチー族の社会秩序の制度も記録している。彼らは野営の小さなテントに住んでおり、仲間が移動するとテントも移動しなければならない。集落の長は一番前のテントに住み、彼がその集落を率いるということは、すべての食べ物や皮を自分の意志で処分することができることを意味した。もし彼が自分の家族に断食させたければ、それは彼に委ねられていた。集落にいる彼の息子や義理の息子は、毎朝彼の指示を仰ぐために彼の前に出た。長は息子たちに対して絶対的な権限を持っていた。彼がたとえボケたとしても、彼がそう望めば家族に対していかなる仕打ちもできた。なぜなら彼らにとって大切なことは、集団で行動することであった。もし長が短気で、専制的であったなら、集落の人々が生き延びる唯一の方法は、権力と富を自分で手に入れることであった。——それは父親を殺してでも。

どのような場合にも、息子たちは父親あるいはいかなる長老からも何かを得ることは期待しなかった。自分たちが飼っている小さなトナカイの丈ほどしか身長がない時から、彼らはツンドラの上で暮らしており、もし自分たちが飼っている半分野性的な動物が逃げてしまうと、一人前の責任を取らされた。思春期が過ぎると、妻を娶らねばならない。その際所有物がない他のチュクチー族と同様、彼らは手ぶらで結婚し、妻のために尽さねばならない。彼らは将来の義理の父親から定期的に侮辱を受ける。北極という気候のなかで彼らはテントの外で寝なければならず、食べかすを与えられる。若い男は嫁の家族からからかわれ、横暴に扱われた。もしそこであきらめて家に帰ったら、自分の父親からなじられ、結婚適齢期の娘がいる別の家族に対して、また同じことを初めからやり直さねばならない。嫁をもらうためにしろ、他のどんな時にしろ、男は自分の家族に助けをもらうことは当てにできなかった。自分の家族に助けをもらえないなら、別の家族も助けない。もし男がトナカイを失ったら、よるべのないホームレスになり、集落から集落へとさまよい、仕方なく一日か二日食べかすを食べ、また終わりのない旅に出かけるのである。

チュクチー族は裕福で独裁国家ではない。彼らは引ったくりがするように、できるだけ富を掻き集めて生活をしていた。他人の介入なくして平和に暮らすことは不可能だった。もちろん

彼らは厳しい環境で暮らしているのだが、地球上の楽園に住む原始社会の人たちもチュクチャー族と同じ位「破滅的な運命」にあると言える。そのような集落に住んでいる男の人に対して、ココナツやパンの木やサゴヤシの木は人の手を借りずにこんなふうになたわに実るのだから、平和に穏やかに暮らしていくというのはそれほどむずかしくないと言うと、彼らはあなたをあざ笑うだろう。穏やかに暮らしていく道が自分たちの前に広がっており、そこを自分の足で歩くという選択が彼らにはないことを知っている。自分たちが自由ではないことを知っているのである。自分の目標を達成するための道のりには、障害物があるということを彼らは一番よくわかっている。そのような社会において、自分の目標に向かうどの段階においても、他の人たち次第であることを彼らはよくわかっている。その道のりの一步一步のなかで、彼らは妨害されるか、相手を力尽くで倒すことによるのみ前に進めるのである。何をするにしても、その集落の他の人を打ちのめすか、おべっか遣いになるかのいずれかになるしかないことを知っている。彼らは暴力と媚びへつらうことしか知らないのである。

2

2年ほど前、私はカナダのブラック・フット族と住んでいた。彼らは豊かで民主的であり、加えて自分たちが自由であることを確信していた。今日でも「破滅的な運命」の意味を彼は解することができないほどである。誰もが望みを持ち、それを実現するために生きていると思っている。それ以外に生きる理由があるだろうか。彼らの生活の糧であったバッファローが消えた今日でも、彼らにとって自由とは息をするのと同じ位自然なものなのだと私は思う。彼らはどのようにしてチュクチャー族とこれほどまでに違う生き方を達成したのだろうか。

ブラック・フット族はイーグル・イン・ザ・スカイズという偉大な酋長から話をたくさん聞いており、最初の入植者や旅人は彼について多くの記録を残している。イーグル・イン・ザ・スカイズはブラック・フット族の輝かしい酋長で裕福だった。ブラック・フット族は裕福であることにのみ価値を置き、裕福でない者は劣っていると考えていた。イーグル・イン・ザ・スカイズは優れた人で、彼の裕福さはそれを証明していた。彼は偉大な狩人で、馬を巧みに捕獲した。彼は何人もの妻を養うことができ、その妻たちは皮を洋服に仕立て、ビーズをあしらった皮を作り、干し肉を作り、ベミカン（訳者注：野牛の肉などを切干しにして砕き、果実や脂肪をつき混ぜて固めたインディアンの食品）を作った。彼はグループのなかで最もよく妻を養ったので、酋長になった。しかし、ブラック・フット族の酋長というのは人々に対して処罰する権限はもってはおらず、酋長の威信は彼が率いるグループの評判に負っていた。

酋長に従う人たちの野心は、酋長の最も大切なもので、グループのメンバーに対して怒鳴ったりするのは酋長にとって得策ではなかった。まだ人前で馬に乗っていない若者でも、いい馬使いとして知られていれば、その若者は狩や襲撃の時に酋長の馬を自由に使うことができた。

その若者が成し遂げたことは、イーグル・イン・ザ・スカイズのグループの栄光と繁栄に貢献するが、賛辞は若者に与えられた。捕まえた馬を分配したり、バッファローの肉を分配する栄光に浴するのもその若者であった。そしてその若者の貧しい家族は彼の武勇を自慢し、居留地のまわりを行進し、彼の業績を叫んだ。彼のような息子を得たいと思うような指導者たちの娘の中から、彼は妻を探した。イーグル・イン・ザ・スカイズの馬を使わせてもらえなければ、彼は部族の評判を上げることはできなかつただろうが、彼に馬を使わせるのは慈悲によるものではない。その若者がバッファローを捕まえたり、敵の馬を獲得したりすることによって、イーグル・イン・ザ・スカイズの自負心は若者の自負心と同じくらい大きくなるのである。栄養が行き届き、乗馬に長けているグループは、あくまでイーグル・イン・ザ・スカイズにとって有利なのである。他のグループに属していたブラック・フット族で自分たちのリーダーに不満を抱いている人たちは、イーグル・イン・ザ・スカイズのグループに入り、彼の栄光にあやかりろうとした。イーグル・イン・ザ・スカイズのグループは拡大していった。グループの人たちは彼に仕え、彼もまたグループのメンバーに仕えた。ある可哀想な若者が襲撃でイーグル・イン・ザ・スカイズのりっぱな馬を失った時、酋長はそれをなんとも思わなかった。自分の馬を部下に使わせてやることで大きな利益が得られるのであれば、たまに馬がなくなったとしても何とも思わなかった。酋長と部下の間に相互利益が循環していた。

能力によって地位が上がることを見届けることによって、イーグル・イン・ザ・スカイズは自分の利益を確保した。そして同時に彼らの利益も確保した。能力さえあれば、部下のだれもが集落のなかで高い地位を得ることができた。トレーニングを受けてお金を払えば、超能力的な力を得ることができた。部族の男にとって義理の父親は、彼の主たる保護者であり、お返しとして狩や戦闘で得た物を義理の父親に分け与えた。同僚から認められさえすれば、若者のキャリアにおいて、同僚から積極的な支持や賞賛が得られた。

こういった部族はたくさんいる。このような社会では、男の地位が高くなればなるほど彼は仲間に対する責任を持たねばならない。彼らから見れば、地位が上がるということはそういうことなのである。逆に何も得られない人がいたとしても、それは破滅的な状況にはならない。何度か一緒にカンガルーの肉を食べた仲間であれば、それを分かち合うのが当然である。それは部族の習慣である。もしハンターとして活躍するのにか弱過ぎる場合は、義理の息子が肉の一番いい部位を持ってきてくれる。それは彼自身が若い時に一番いい部位を義理のお父さんに持って行ったのと同じである。このような行動は自分の利益よりも相手の利益を尊重しているようにみえるが、彼らにそれを言うと、彼らはそれをまったく受け入れない。彼らは自分たちが選んだことをしているとしか思わない。それ以外の生き方なんてあるはずがないのだ。

3

ブラック・フット族が抱く満足感と自由であるという感覚はどこからきており、チュクチャー族が強く感じる自分たちの悲惨な運命がどこからきているのかといったことは、それぞれの部族に問いかけねばならない。今日我々は自由を守るための戦争をしている。そして勝利に役立つとされている戦略を理解しなければならない。そのためには近代の問題を抱えた民主社会のデータよりもっと広い範囲のデータが必要である。文化人類学者からそれを得るのが最もよいだろう。

文化人類学者は自分の社会よりもなるべく違う社会を研究しようとするため、様々な集団のデータを持っている。そして西洋文明の影響範囲からはずれたところで発展したシンプルな社会を特に研究する。文化人類学者はある集団が特定の価値観に基づいて実現した方略を研究することができる。その価値観とは自由という価値観なのか、社会統一という価値観なのか、権力に屈するという価値観なのかを研究することができる。文化人類学者にとって部族の役割は、科学者が細菌の生死を研究する実験室の役割と同じなのである。文化人類学者の実験室は研究者が自分で設定するのではない。それは原住民が何世代にもわたって、何千年もかけて生き方の詳細にいたるまで設定したものである。しかしフィールド・ワーカーはその部族のなかに存在する私たちの時事問題を、たとえそれが違った姿であったとしても認識することができる。

フィールド・ワーカーが研究している裸のプリミティブ・ピープルはもちろん社会保障の条例について話すわけではない。しかし彼らは老人や飢えた人をどのように扱うべきかははっきりしている。年寄りや飢えた人を守る部族もあれば、守らない部族もいる。そして文化人類学者はそれがもたらす帰結を研究することができる。原住民は黄金率について語らないが、オーストラリアの原住民からカラハリ砂漠の原住民にいたるまで、黄金率が働いていることは見受けられる。たとえば、「他人に施しを与えなければ、誰が自分に施しを与えてくれるだろう」、「他人を敬わなければ誰が自分を敬ってくれるだろう」といった教訓は、若者の頭にたたきこまれ、南洋の島々の人からティエラ・デ・フィエゴの冷たい霧にすむ人に至るまで、それを実践している。同時にこのような黄金率がまったくない原始社会があり、文化人類学者は黄金率が存在する結果と、しない結果を研究することができる。黄金率は人を支配するのだろうか？プリミティブ・ピープルのなかで黄金率に縛られた人間関係しか知らない人もいれば、相手を強いる状況に立たされたことがないプリミティブ・ピープルもいる。

自由においても同じことが言える。今日私たちは自由を求めて戦っているが、どのようにして自由を得るかという戦略については戸惑いが見られる。自由を論じるのに問題となる点は、今でもそしてこれまでも同じであり、それは個人の目標を追求させるために社会は何ができるかということである。ブラック・フット族の社会のように成功している社会もあれば、チュクチャー族のように失敗している社会もある。

ブラック・フット族のように成功している社会において私たちが問わなければならないのは、彼らが民主社会であるがゆえに自由と感じているのかということである。無文字の部族でも政治的な独裁主義の浸透がそれほどみられず、社会をコントロールしているのが究極的には市民であれば、その社会は民主社会といえる。しかし民主社会そのものが自由の恵みを保障するわけではない。多くの民主社会で人々は、同じ部族による攻撃から守られているという確信はもてず、眠れない夜を過ごしている。これは彼らの人生を暴力と不満で充たし、非常に不幸なことではある。しかしながら彼らの経験から私たちは切実に必要としている情報を得ることができる。

社会を人々の手に委ねることによって、その人々が自由に生きることが保障されるわけではない。自分たちが自由だと思っている社会のほとんどは民主社会であるが、そういった社会でも強い酋長や王がいることがある。その社会が民主社会であろうが、王国であろうが、ひとつの共通する特徴をもっている。それはすべての市民にある種の共通の自由を与えていることで、それは市民から取り上げることができないものとしていることである。他人に妨害させないように、社会が時折折ってきたものをアメリカの単語では市民権とよぶ。人民保護法、法のまへの平等、言論と集会の自由はすべての人に保障されているために、成立できたりできなかったりする。つまり私がかもっている権限は人ももっている権限でもあるため、自分の権限を主張できたりできなかったりする。市民権は特定の社会において、すべての市民に共通のものと決められた特権にすぎない。

原始社会においても市民権はある。その要となる点は、それがすべての人に差別することなく保障されていることである。これらの特権や保護を保障され、それに価値を見いだしている部族は、たとえどんな政治的体制下にあっても、自分たちを自由の恵を受けている人々だと考えている。

4

どの社会も市民に独自の権利を与えている。社会によってはその権利はわれわれのものより古く、別のところでは我々のところよりももっと限定されている。その市民権は正式な法で保障されており、その他の権利は単なる慣習として守られている。人間社会のなかで最も一般的な権限はその社会に受け入れられるということである。誰かがたずねてきたら、その人が部族の一員であるか否かをきくことなく、人は食べ物を与えるのが一般である。そしてその人の市民権は一日のみのおもてなしで終わるものではない。イーグル・イン・ザ・スカイ酋長がいるブラック・フットの集落では、食べ物がある限り誰も飢えることはない。酋長がこのように集落の人の生きる権利を尊重するのは、慈善ではなく、すべての集落の人がもっている市民権のひとつとして食べ物を与えられているのである。食べ物が不足している時は、だれが獲物をも

ってくるとか、誰が穀物畑や家畜をもっているかは関係なく、食べ物はみんなに同じように振る舞われる。おもてなしのエチケットとして食べ物が少ない人たちは、たくさんもっている人の客となり、食べ物が与えられる。それは自分にもいずれ「回ってくる」ことでお互いさまなのである。

集落によっては食べ物を必要としなくても、象徴的ジェスチャーとしてよその家と食べ物を分け合うことがある。そしてこれが度を越すこともある。各家で鍋が煮えると女たちは中身を取り出し、それをもってあちこちの家に配り、代わりにシチューをもらう。そして最後に各家族は20人余りの主婦が作った料理の入った鍋のまわりに集まる。見返りを考えることは全くない。夕食を食べる権利はすべての人に与えられ、取り上げられることはないという考えから始まり、すべての集落の人が集落にあるすべての鍋の中身を食べるべきだという考えにいたっているのである。

原住民の間でよくあるもう一つの市民権は、生活を支える仕事を肉体的にできるようになった若者たちに対する保障である。男子や女子が大人並みの体力に達したら、集団の食料品を確保するために畑と耕作道具と家畜を与えられることが部族にとってよいことだと考えられている。若者が自分たちの両親に頼っておれば、部族に貢献することは不可能となる。若者の問題を解決することは各原始社会によって異なる。

自分たちの食料を得るためにとうもろこし畑にたよっていた多くの南アメリカ・インディアンの集落においては、毎年畑を再配分する。そうすることによってすべての男子が耕作可能な畑を与えられる。世界の他の地域の部落では、修業中の若者に過剰なまでの贈り物が与えられ、若者が怠け者でない限り、大人としての責任がもてるようになった頃には必要な道具がすべて揃うはずである。

他の部落では、道具より技術が重要で、特に狩をする部落では熊を見つけ出したり、バッファローを倒したりという大胆な妙技の練習を通して男子の能力や自身が磨かれることに重点が置かれている。子どもの能力はその子が過去に達成したことを基準に慎重に見極められる。子どもの能力は大人が恣意的に作った基準によって見極められることはない。男子は兄か叔父に狩の仕方を教わり、たとえ小さなネズミでも捕まえると部落全体から賞賛され、鼓舞される。獲物が大きくなればなるほど彼は褒め称えられる。彼らにいわせると、子どもに自信を与えるのは当然のことなのである。

このような集落における最も重要な市民権は、自分の能力に合った機会が与えられることである。地位が開放され、誰もが自由に地位を得ることが可能となれば、その地位の責任や重大性とそれにとまなう特権とを天秤にかけ、人は自分の野心を抑制することができる。酋長になることは誰がみても晴れがましいが、人はしばしば誰かに従う役割を喜んで引受ける。酋長には多くが求められるので、もう少し荷の軽い役割をすすんで引き受ける者も多い。財産家、シャーマン、僧侶、戦闘の指導者、薬草の束をたくさん持っている人は、人から多くのことを求

められる。そのため人はこれらの地位を得るのにもなう厳しい訓練や責任を果たすことを避けたがる。

5

しかし特権集団が責任を負わされることなく好きなようにふるまっても特権を維持できる場合、個人の自由は脅かされる。それは一つの集団が特権を持っているが故に起きる現象ではない。酋長イーグル・イン・ザ・スカイズも相当な特権を持っていた。しかし、特権集団が存在し得るのは人々の労力のたまものであり、それを尊重しなければ、一部の人たちが他の人たちに還元することなく、自分たちの特権を維持することになる。チュクチャー社会がそうであったように、そのような社会秩序においては、自由は脅かされる。

つまりどの社会においても自由になるにはこの還元する要素がなくてはならない。特権があることは、他の人に少なく還元するのではなく、より多く還元しなければならない。もし王さまが報酬を得ているのだとすれば、その報酬を人々のために使っていると思われるようではなければならない。もし呪術師が超自然な力をもっているとすると、人をじわじわ殺すためにそれを使うのではなく、彼の祈りによって畑に雨をもたらし、人々の寿命を延ばすために使われねばならない。もし金持ちが特権をもっていたら、彼らの所有物によって他の人の生活が脅かされたり、自然の資源が枯渇されるようなことがあってはならない。そうでなければ、人々は自分たちの目標に自信がもてなくなってしまう。人々は自分たちの目標を達成することが妨害されていると感じ、深刻な欲求不満にもなう姑息さや、攻撃性を見せるようになる。彼らは自由ではなくなる。特権がある人たちでさえ自由ではなくなる。なぜなら、他の人たちを犠牲にしてのみ特権が得られる社会では、権力ある人たちはある意味、弱い立場の人よりさらに危険にさらされることになる。彼らは根本で切り倒されるのではないかという不安にかられる。「一番高い檜の木が一番大きな音をたてて崩れる。」

特権と信頼が一つになっている社会では、市民権が継続され、拡張される。そのような社会では株を共有している会社のように社会全体を統一することができ、権限を否定することは構成員一人ひとりにとって脅威となるのである。それは力強く、活気に満ちた社会が成り立つ基盤となり、個人が内に感じる自由の基盤でもある。

このような自由に関する主張を戦争状態にある西洋文明の中で聞くと、平和状態で聞くより異質なものと感じない。私たちが社会構成員全員にとってよいことを支持し、誰もがその集団に対して忠誠心を誓うのはまさに戦時中の時なのである。個人に利益をもたらすことによって工業を進化させてきた国が、戦争が始まると個人の利益という動機を排除するか、隠蔽するかによってグループの忠誠心を推し測るのは皮肉なことである。戦争という大きな危機において、私たちは競争という動機づけに背を向ける。利益が得られるということが人を働かせる唯一の

誘因となりうると知識人は口をそろえて言うが、そのような方法で労働を誘因するのはあまりにも弱々しく、お金がかかりすぎる。戦争時になると共有する善のため、そして自国を守るためみんなが力を合わせるという気持ちが呼び起こされる。人間は戦争を好むものだと一般的に考えられている。平和時においては、人の心は狭くなり、己の利益だけを考えるようになる。これは危険で孤独な状態である。どんなに苦しんでも、人間は戦争の危険を好むということが繰り返し証明されてきた。戦争はそれなりに見返りがあるのだ。

ここから得る教訓は、戦争が人間にとって欠かせないものだというのではなく、戦争時において得られる人間の喜びは、社会秩序によって平和には奪われているということである。それに比してミシシッピ大平原の多くのインディアンの部族の状況は、平和時と戦争時の状況が逆である。平和時の部族同士のやりとりは共同出資の会社と同じように利益を共有し、義務も分散されている。敵は人間とも見なされず、その敵を犠牲にして難なく個人の利益を手に入れることができるのである。ダコタ族は勇敢で根っからの戦争好きであった。彼らは近隣の部族から恐れられていた。しかし国は彼らの功績には全く無関心であった。政治的な目的で軍隊が派遣されることもなく、彼らには他の部族を支配するという考えは思いもしないことであった。戦争に加わっている若い青年たちは手柄をどんどん増やしていった。例えばキャンプ先にいた敵の馬を盗み、倒れた敵がまだ生きている間に触れ、頭皮を剥ぎ、敵の陣地から傷ついたり、殺された部族を助け出したりした。これらの手柄は加算され、仲間と張り合う時に使われた。戦争とそれにとまなうことは競争であった。戦争の部隊に入隊する理由は愛国心からではなく、一旗揚げたいために入隊した。戦闘部隊が敵地に入ると、隊員はそれぞれ一番りっぱな服装をして羽根飾りをつけた。羽根の一本いっぽんは彼が過去に成し遂げた手柄を表していた。隊員たちが本拠地に帰ると、英雄となった人たちの家族や彼と何らかのつながりがある人たちが集まり、彼の功績を称えた。兵隊たちは死ぬまで競い合って自分たちの成し遂げた手柄を自慢しあうのである。集会場には100以上の数え棒が置いてあり、誰が一番多くの棒を手に入れ、自分たちの手柄話しができるかということを競い合った。

ダコタ族の集団生活のなかのすべての事柄は、お互いの利益とグループに対する忠誠心に基づいて行われている。大家族のなかの関係、グループのなかの関係、そして部族全体の関係は、協力体として成り立っており、そこでの相互支援はすべての男に名誉を与えた。ダコタ族にとって最もひどい悪口は、「彼は人のことを思うより自分のことを優先させる」と言われることである。彼らはこれを文字通り受け取り、何か人に施しを与える機会があれば、「どんなに人のことを思っているか示した」。そしてもちろん人に気前よく物をあげると、集落におけるその人の地位は上がった。ノブレス・オブリージュ（訳者注：高貴な身分に伴う義務）を彼らは文字通り実践した。出世して裕福で強力な家庭を持った人は、気前がよくなければならず、また色々な形で人助けをしなければならなかった。それが彼の名誉ある地位の中心の一部であった。ダコタ族はグループに対する忠誠心を平和の時期としっかり結びつけている。

1942年の枢軸国との戦争は、各自が自分個人の成功を収めるためのダコタ式ゲリラ戦ではなかった。それは人間社会をどのように設定するかを決する二つのイデオロギーの戦いだった。ナチスの理論と実践は個人の自由を奪い、一人のリーダーに従わせ、強くて支配的な侵略者が劣等種を奴隷にし、新しい秩序のために自己犠牲を強いるものだった。民主主義はさまざまな欠点を持っているが、その哲学の基本となっているものは、共有し得る自由と、その自由を拡大するような政治的枠組を提供することである。枢軸国は演説のなかで「自由」(freedom)ということばを使うが、枢軸国の「自由」は共有することができない自由である。なぜなら彼らの言う「自由」は、弱者の存在を前提としたものだからである。彼らの言う「自由」は服従させられている人たちから奪うものであり、その「自由」は最も弱い立場にいる人たちに対して、露な力を使う「自由」であり、反対者を家から引きずり出し、すぐに殺す「自由」である。枢軸国はこのようなやり方を国是としており、それは市民権を根こそぎ奪ってしまうやり方である。人を恐怖で支配するような国は、その恐怖の力を広げようとし、選んだ道を歩み続けなければならない。

そのため人間社会の歴史のなかでナチスのイデオロギーとナチスの広がり止めるために民主主義が存在する確固たる理由がある。ナチスに反対しなければならない理由の基盤には、市民権を社会に行き渡らせ、みんなで共有すべきだという考えがある。どんな人間社会においても、市民権を得るにはそれなりの犠牲を払わねばならない。市民権はすべての市民、そして部族の人たちに利益を与えている。一方、特権あるいは恣意的な権限はそれらを振りかざす人々にブーメランのように戻ってきて、彼らを打ちのめす。そしてそれは闘争をもたらし、社会全体に恐怖をもたらすことがしばしばある。そのため我々の国アメリカでは、大陸において自由がなくならないように大きな犠牲を払っているのである。今議論されるべきことは、どのようにして自分たちを強くし、穢れのないようにするかということである。この偉大な目的を達成し、敵の穢れから自分たちを守るには、市民権を守らなければならないことを頭にたたき込んでおかねばならない。私たちはすでに自由を得た分野でその自由が縮小されることがないようにし、まだ自由がない分野においても自由を拡大しなければならない。なぜなら自由は人に与えない限り、誰も得ることができないものだからである。

注

* *The Atlantic Monthly*, 169, No. 6 (1942), 756-763

